第３回原子力委員会定例会議議事録

１．日　時　　令和８年１月２０日（火）１４：００～１４：４２

２．場　所　　中央合同庁舎第８号館６階６２３会議室

３．出席者　　原子力委員会

上坂委員長、直井委員、吉橋委員、畑澤参与

内閣府原子力政策担当室

中島参事官

京都大学大学院　医学研究科

中本教授

４．議　題

（１）The Consortium of Universities and Institutions in Japanの紹介について

（２）その他

５．審議事項

（上坂委員長）それでは、時間になりましたので、令和８年第３回原子力委員会定例会議を開催いたします。

本日は、畑澤参与に御出席いただいております。

本日の議題ですが、一つ目がThe Consortium of Universities and Institutions in Japanの紹介について、二つ目がその他であります。

それでは、事務局から説明をお願いいたします。

（中島参事官）それでは、一つ目の議題、The Consortium of Universities and Institutions in Japanの紹介について、京都大学大学院医学研究科教授、中本裕士様より御説明を頂きます。本件は、原子力利用に関する基本的考え方の３．７、放射線ラジオアイソトープの利用の展開に主に関連するものです。

それでは、中本教授から御説明をよろしくお願いいたします。

（中本教授）皆さん、こんにちは、京都大学の中本と申します。私の方からThe Consortium

of Universities and Institutions in Japan、略してＣＵＩＪの説明をさせていただきます。

次、お願いします。２０１８年になりますけれども、ＩＡＥＡと日本国内の１１施設との間でコンソーシアムを締結しまして、核医学診療のトレーニングを行っていこうという目的でコンソーシアムが締結されました。日本側の１１施設としましては、右側にあります北海道大学、東北大学、南東北病院などと全国に及んでおります。

次、お願いします。次、お願いします。ちょっとアップデート版と違っていたので申し訳ありませんでした。いいです。ちょっと元に戻していただきまして。

目的と背景ですけれども、世界では年間３，５００万件以上の核医学検査が実施されて、がんを中心に心疾患・神経疾患などに利用されております。人材としては育成体制が不足していまして、核医学医師の研修が不可欠であると。日本は比較的進んでいたところがありますので、核医学分野の専門を担っている施設と提携して、国際的な人材の育成、特にアジア地域になりますけれども、人材育成と医療水準の向上を支援していくという目的で行われたものでございます。

ＩＡＥＡと日本の１１機関の協定概要としては書いてありますように、これ非感染性疾患として特にアルツハイマー病、パーキンソン病、あと腫瘍ももちろん含まれてきております。臨床実践、研究支援、継続教育、核医学カリキュラム開発を日本機関と連携して強化するということで進めてまいりました。

次、お願いします。このとき、各施設のトップとの間での締結となりますので、結構時間を要した上で締結を結んでおります。

次、お願いします。２０１８年にコンソーシアム出来上がりまして、２０１９年から実際にイベントが開催されております。ワークショップとしましては４件、視察、施設見学、こちらは３件が行われております。

次、お願いします。２０２０年は御承知のとおりコロナでほぼ全てのイベントが中止または延期となりまして、２０２１年頃から少しずつ再開されました。ただ、このときもまだコロナ禍が続いておりましたので、元々はオンサイトで行おうと企画したんですけれども、実際には施設の条件、まだ集会を開いてはいけないとか色々と制約がありましたので、オンラインでこれら３つのイベントが開催されております。

そのイベントの一例としまして、プログラムを提示しております。こちらが２０２１年にオンラインで行われたものでございます。このときは講師の先生としてヨーロッパの先生が

２人ほど入られましたので、ヨーロッパの朝、一番東側の国は日本ということになりますので、日本時間の１５時からのスタート、このときヨーロッパは午前８時からのスタートとなります。オンラインで朝から晩までというのも大変ですので、１５時から１９時ぐらいまでにしようということで、月、火、水、木、金曜日は確認テストなどを行っているというようなプログラムで行っております。

次、お願いします。その翌年は京都で世界核医学会というのが開催されることになっていましたので、そのときに実際にその核医学会に参加してもらうと共に、このセミナーを受けていただこうということで企画したんですけれども、やはり結果的にまだコロナ禍が続いていたので、オンラインの実施ということになりました。ただ、集会ができなかったんですけれども、ヨーロッパの先生は日本に来日することができましたので、このときはアジアの国の先生方、受講者はオンラインで、我々及びヨーロッパの先生は日本側にいて行うということで、１３時から１７時までのスケジュールで行っております。

一部、このときはセミナーのみならず、世界核医学会の受講も一緒に合わせて行おうということで、このようなセミナー以外の世界核医学会のイベントも取り込んでプログラムを作りました。

２０２３年に、ちょうど５年経ちましたので、更新ということになりまして、そのときに２施設、２０１８年からの施設は２施設が継続を辞退しまして、代わりに香川大学と湘南鎌倉総合病院が新たに加わるということになりました。更新、このような契約を公開しております。

次、お願いします。このとき、この年２０２３年の夏に一度ＣＵＩＪの関係施設の代表者及びＩＡＥＡからの代表者と共に会を持っております。どういう形で行うべきか、あるいは今後につなげたディスカッションが行われました。

その翌年、ＩＡＥＡの方から、放射線治療の５施設と合わせて、これまでのＣＵＩＪの１１施設、これは核医学中心になりますけれども、と放射線治療の５施設とを合わせた下で、Rays of Hopeという枠組みの下でこの活動を続けてほしいということで、少し枠組みが変わりました。ただ、実際にやっていることはＣＵＩＪとしての各施設で核医学の診療を中心とするセミナーを中心とするものになりますので、内容自体はあまり変わっておりません。枠組みが少し変わりました。

各施設でどのようなことを行うかに関してですけれども、各施設によって同じ核医学でも特徴あるいは得意分野とするところがありますので、このようにまず各施設にどういう内容

であったら受けやすい、受けたいということでアンケートをあらかじめ行っております。

あと、実際の受入れ人員ですとか、あるいは開催の頻度ですとか、そのようなものもこのようにアンケート調査であらかじめ情報として得て、年に２回ぐらい、２、３回ぐらい行っております。

２０２４年に公開されてからのワークショップが２件行われておりまして、このときは夏に湘南鎌倉総合病院、１５か国、１９人の参加で行っております。

もう一つ、秋には京都大学、大阪医薬大及び大阪大学の方で６か国、このときはアラブ系の、西アジアの国が中心となりましたが、６か国、６人の参加の下にワークショップを行っております。

次、お願いします。２０２５年にワークショップが１件、施設の視察及び研修が３件行われております。

次、お願いします。セミナーの内容で一つ特徴的なものは、最初の日と最後の日に理解度チェックを行いまして、どのぐらいセミナーが有用だったかということをチェックするようなことを行っております。１つの問題、２０問ぐらいありまして、それを出しております。左側のような試験があって、右側がプリテストの成績とポストテストの成績、アベレージとして少し上がっていることが分かるかと思います。一人の方はセミナーを受けてむしろ成績が悪くなっているという人がいますけれども、例外的なものかと思います。

左下がこのセミナーがどの程度有用でしたかということをアンケート調査を行っておりまして、非常に有用が１５人、有用だったが４人と、ほぼ皆さん満足しておられるようです。

次、お願いします。実際のセミナーでの雰囲気の写真を紹介いたしますと。これは２０２４年、２年前の８月に湘南鎌倉総合病院で行った、１９人の参加者の下に行ったものでございます。その後、アラブ系の人々と京大、大阪医薬大、阪大で行ったときの様子ですね。

最後、このようなセミナーが終わりますと、次、お願いします。このようにサーティフィケートというものを発行しまして、実際に受講されましたということに敬意を表して皆さんにお渡ししております。

昨年の９月には、同じように京大と藤田医科大、阪大でScientific Visitという形で行いまして、それぞれの施設で見学及びセミナーなどを開きまして、最後には同じようにサーティフィケートを発行しております。

次、お願いします。最後のスライドになりますけれども、これは今度３月に香川大でワークショップを予定しておりまして、現時点のプログラムとなります。通常は５日間でするこ

とが多いんですけれども、今回は４日間でセミナーを朝から夕方まで行う予定にしております。まだ参加者確定はしておりませんけれども、大体２０人ぐらいになる予定と聞いております。

以上です。どうもありがとうございました。

（上坂委員長）中本先生、ありがとうございました。

ＩＡＥＡの連続報告とジョイントのすばらしい国際的核医学のセミナーの御説明をどうもありがとうございました。

それでは、これから質問させていただきます。

それでは、直井委員からお願いします。

（直井委員）どうも中本先生、御説明ありがとうございました。

日本が得意とするこの核医学の検査の画像診断分野などで、アジア地域を中心に専門人材の育成ですとか能力向上のために長年にわたってＩＡＥＡと共にトレーニングなどを提供されて、国際貢献を果たされているということに敬意を表したいと思います。

１１の大学や研究機関などがコンソーシアムを組んで連携をして対応されるというところがサステイナビリティといいますか、今後も継続して行える体制にもなりますし、日本側もこのような活動を通して学びが得られて、国際的なネットワーク構築にも意義があるのではないかというふうに思いました。

一つ目の質問ですけれども、この１１の大学、研究施設のコンソーシアムの事務局は今は京都大学さんがされているという認識でよろしかったでしょうか。

（中本教授）はい、ありがとうございます。おっしゃるとおりです。まだ一応ホームページは、阪大で畑澤先生が作られたときのものがまだ残っているんですけれども、実際、今まとめ役は私の方でさせていただくことになりましたので、一応京都大学にあるという、まだホームページはできておりません。

（直井委員）ありがとうございます。

それから、この協力に向けてコンソーシアムとＩＡＥＡがプラクティカルアレンジメントを締結して、更に関係する施設がＩＡＥＡの共同センターとしてRays of Hopeの傘下にアンカーセンターとして看板が与えられるという大変すばらしいことだなというふうに思いました。

一方で、京都大学の中本先生がこういった事務局を務めるということで、こういったイベントを通常の仕事にプラスアルファで行うということは、なかなか大変な御苦労があるもの

と推察いたしますけれども、このような活動を継続していくに当たって、課題ですとか、こういう改善がなされれば更によくなるといった御意見ございましたらお願いいたします。

（中本教授）ありがとうございます。やはりまさにおっしゃるとおりで、これだけをやっていく訳にはいかないので、実際にイベントを通して感じましたことは、今現在ウィーンに丸山さんという方が事務局というかお手伝いという形で、むしろ正式なスタッフという訳ではないそうなんですけれども、出向という形でウィーンのＩＡＥＡに常勤という形で勤めておられまして、その丸山さんから非常に的確で豊富な情報が与えられるのですね。そのおかげが非常に大きかったかと思いますので、やはりウィーンに誰か一人。日本側は割と何とか伝えればこれまで結構付き合いのある人々が多いので何とかなること多いんですけれども、ＩＡＥＡの考えでこういうことをしてほしいとなったときに、それを咀嚼して、こちらも何も分かっていないところをこういうところに気をつけてください、こういう規則がありますということをしっかりと的確に教えてくれる丸山さんみたいな事務局の方が非常にありがたい、継続していく上では重要かなと考えております。

（直井委員）ありがとうございます。やはりＩＡＥＡの事務局がしっかりしているか、しっかりしてないかというところがイベントの成否を分けるというふうに思います、私も。

それで、これまでの活動を通じてスピンオフといいますか、予期せぬ副産物といいますか、良好事例について何かございましたら教えていただけますでしょうか。

（中本教授）やはり先ほどおっしゃっていただきましたような、これを通じて知り合いになって、その後の交流が生まれるということは確かにございます。

一例を申し上げますと、２０２４年の夏に湘南鎌倉総合病院で行われたときに、講師で招かれた京大に子安といううちの教職員がおりますけれども、彼がそこで知り合って、タイの方でイベントするときにそこに呼ばれて行ったりとかしておりますし。あと、まだ私のワッツアップにはこの２０２４年のときに京大、阪大で行ったときの仲間のグループのあれがまだ残っておりまして、まだ時々そのメッセージが流れてくると。これはやはり草の根の交流に役立つかなと思います。

（直井委員）ありがとうございます。こういった日本の貢献、これは日本のソフトパワーを示す貢献になると思いますので、頑張っていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。私からは以上です。

（上坂委員長）それでは、吉橋委員、お願いいたします。

（吉橋委員）中本先生、ＩＡＥＡと日本の核医学の教育コンソーシアムについて御紹介いただ

いて、ありがとうございます。

２０１９年からですかね、多くの研修だったりワークショップを開催されていて、核医学検査が今は中心かと思いますけれども、その発展において非常に意味のあることだなと感じました。

先ほど直井委員の質問にもありましたが、私の認識として一度確認させてください。このワークショップの運営といいますか、ＩＡＥＡと日本側の役割というと、先ほどの御回答だとＩＡＥＡから何らかの指示が日本側にあって、それを日本が運営していくというような形ということでよろしかったのでしょうか。

（中本教授）おっしゃるとおりです。

（吉橋委員）アジアであったり、先ほどのアラブ諸国への募集ですかね、それはどちらが行っているのですか。

（中本教授）ＩＡＥＡの方で行っております。まずＩＡＥＡでこういうことをやりたいという話があって、日本側に打診があって、一応それを受けますということにして、その後プログラムをつくるようになりまして、そのプログラムつくったものを、ＩＡＥＡ側の希望もかなりあるんですけれども、それである程度のプログラムが出来上がったら、それを基にしてこういうことをやるので募集しますということで募集をかけまして、旅費、宿泊費、参加に必要な費用なんかは全てＩＡＥＡが持って、アジアの国から日本にやって来てセミナーを受けて帰るというような流れの下です。

（吉橋委員）ありがとうございます。

それで、表紙であったり沢山の写真をお見せいただいたんですけれども、非常に女性が多いなという印象を受けているのですが、実際のところ参加者の男女の割合であるとか、あとはでは逆に日本側の男女の割合というか、そのあたりについて教えてください。

（中本教授）元々放射線科医、比較的女性が多いというのもあるんですけれども、男性の方が多いんですけれども、大体ざっくりで６、４から７、３ぐらいでしょうか、かなり女性の参加、受講者多いと思いますし、また我々側の講師の方でも比較的女性にお願いすることが多いですね。携わっている女性が結構多いので、性差はあまり、ちょっとそれでも男性が多い傾向にはございます。

（吉橋委員）ありがとうございます。では、日本側も比較的講師も含めて女性の参加者がいらっしゃるということですね。

（中本教授）はい。今例えば例に取りますと、京都大学の放射線科の中で核医学を専門とやっ

ている、基本的には放射線科医ですので核医学だけやっている訳ではないんですけれども。核医学をメインにやっているスタッフとして、全部で自分も入れて７人ぐらいになりまして、２人は女性ですね。ですので、２、４、男性の方が多いですね。でも、女性がまれということはなくて。

あと、２０２４年の阪大、あるいは２０２５年に京大・阪大で行ったときの阪大側のまとめ役の先生は礒橋先生、女性の先生、核医学をされている女性の先生が色々とマネジメントをしていただいています。

（吉橋委員）ありがとうございます。非常に良いことだなと思いました。どうしてもこういったイベントがあったりしますと、海外は女性の参加者が多いのに日本側は講師も含めて男性が多いというようなことが多々ありますけれども、ご紹介いただいた取組では講師も女性という、非常にバランスがいいなと感じました。

最後ですけれども、１１ページ目にお示しいただいていたスペシャリゼーションの中でニュークリアフィジックスとかこういったことを専門としている機関が少ないというのは、現在は先ほどもお話があった放射線科医の方を対象にした教育だったからということを推測いたします。

（中本教授）そうですね、はい。

（吉橋委員）ただその一方で、今後核医学といいますと、放射線治療に関しましても、技師さんだったり看護師さんだったり医学物理士さんだったり、そういった方が重要な役割を担ってくるのかなと思います。そのようなことから、このコンソーシアムで物理教育といいますか、少し対象ではないところに対する展開というような計画がもしあれば教えてください。

（中本教授）ありがとうございます。現時点で具体的にどういうふうに進めようというところには至っていないんですけれども、次回また２月下旬に丸山さんが一時帰国されまして、今後のＣＵＩＪの方向性をディスカッションする機会がありますし、元々は今年３月のこの香川の後にＩＡＥＡのエンリケさんという方、中心となる方に来ていただいて、日本のＣＵＩＪの１１施設の代表とディスカッションしようという計画はあったんですけれども、結局御事情でそれがなくなってしまったんですけれども。多分来年までには１回ＣＵＩＪの施設の代表者と、実働部隊の代表者とＩＡＥＡ側の方とディスカッションする予定にしておりますので、そのときの話題にできればなというふうに思います。

おっしゃるとおり、核医学もどんどん治療の方向に、診断のみならず治療の方もどんどん進んで、セラノスティックスとして進んでいますので、医師のみならず技師、薬剤師、看護

師、医療物理士、色々な方のお力が必要になってくる領域だと思います。

（吉橋委員）ありがとうございます。今後の発展に期待しております。ありがとうございました。

（上坂委員長）それでは、畑澤参与からも御意見を頂ければと思います。よろしくお願いします。

（畑澤参与）中本先生、どうも今日はありがとうございました。このＣＵＩＪの立ち上がりのときに私も少しお手伝いをしたことがありまして、その後順調に、若しくは期待以上に拡大して活発な活動を続けられているということに敬意を表したいと思います。

最初の質問ですけれども、９ページ目のスライドにセカンドコーディネーションミーティングの写真が載っております。このときにお出でになったエンリケ先生とその隣の先生、非常にＩＡＥＡとしてこの活動に期待をしているということをお話ししていたのが印象的でした。その理由というのは、一つの国の中の複数の施設がコンソーシアムをつくってＩＡＥＡと契約をしたというのはこれが初めてのケースで、大体どこの国でも一つの大学なり機関が全てを握って、他の大学と共同しないというのが通例だそうです。ですから、１１の施設が仲良くこういうふうな活動をしているというのは初めてだというふうにおっしゃっていたのを記憶しております。

そのときのコーディネーションミーティングで、オセアニアの国々にも展開したいんだということを強くおっしゃっていたように思うのですけれども。それで、１５枚目の２０２５年に開催されたイベントの中で、１番にトレーニングコースですね、Quality and Radiation Safety in Diagnostic Radiologyで、バヌアツ、フィジー、モルディブ、パプアニューギニア、こういう国々からまさにＩＡＥＡがこれから展開していこうという国々から放射線科医、若しくは放射線関連のスタッフを日本に来ていただいて、国際医療福祉大学がコースを設計してもらったというふうに理解いたしましたけれども。この活動について、その後どのような展開といいますか、オセアニア島嶼国を集めた企画というのは今後も続いていくというふうに理解してよろしいのでしょうか。

（中本教授）ありがとうございます。実はあまり関与しておりませんで、国際医療福祉大学で上田技師長が確か絡んでいたと思うんですね。このとき。ですので、これむしろ丸山さんからこの国際医療福祉大学でもこのように行いましたということは結構これで教わったんですけれども、実はあまりしっかりと把握しておりませんで、まとめ役といいながらしっかり把握しておりませんで、その後どういうふうに展開するかということも含めまして全く存じ上

げなかったというのが正直なところでございます。

ただ、やはり発展途上国といっても実際に東南アジアの国ですとか、あるいはインドとか、日本よりもむしろちょっと、よりもと言うとちょっと言い過ぎですけれども、日本と同等ぐらい結構進んでいるところもあったりしますので、むしろこのような国、どちらかというと小さな国ですかね、そういうところでのより普及活動というのは今後ますます重要性を増すのではないかなと考えております。

（畑澤参与）ありがとうございました。

もう一つの点は、ワークショップを開催したときの内容といいますか、カリキュラムというか、シラバスといったらいいのでしょうか、参考にするような資料とかガイドラインとかそういうものはもう既にあるものでしょうか。それとも日本でやるから日本のスタンダードでやるというようなことだったのでしょうか。その辺をちょっと。

（中本教授）現状では特にＩＡＥＡからガイドラインを示されていることはございませんで、日本の独自のカリキュラムといいますか、シラバスをつくって、それに基づいてスライドもつくって、セミナーを行うというような流れでやっておりました。ただ、確かにおっしゃるとおり、日本の標準と世界の標準あるいはその国で求められていることというのは内容の異なる可能性が十分ありますので、セラノスティックスとかペットを使って病変の標的を評価して治療をつなげるというところ自体は変わらないと思うんですけれども、それ以外の一般の核医学の領域というのは、例えば東南アジアでしたら感染症まだまだ多いと思いますので、そういうところというのは、日本は十分貢献できていない可能性はあるかと思いますので、いずれはそのような内容の見直しも必要になってくるかも知れないですね。

（畑澤参与）ありがとうございます。

もう一つの点は、現在１１の施設がこの運営に関係しておりますけれども、この１１の施設が更に増えていってくれればいいな、というふうに思うんですけれども、そういう国内での展開若しくはこの参加する機関の増加というのは今後見込まれるものなのか、若しくはそのために何か活動をなさっているのか、そのあたりのことをちょっとだけ教えていただければと思います。

（中本教授）そうですね、これもまたＩＡＥＡの方とのディスカッションの中で考えていくといいかなと思いますけれども。増やす可能性は十分あるかと個人的には思っております。というのが、もしこれが日本国内でより増やして何か決め事をするということになりますと、色々とものを言いたい人が増えてかえって収拾がつかなくなるのではないかなという気がす

るんですけれども。これ基本的にはＩＡＥＡと日本の複数施設なので、ＩＡＥＡがかなりこうしてほしいと強い要望があったりしますので、我々はそれをどう受けて上手くやっていくかというところになりますので、むしろ同志という感じで、お互いが、元々は敵視する訳ではありませんけれども、かなり同志のイメージがありますし。

更に、核医学って放射線科というマイナーな中のどちらかというとマイナーというところになるかと思いますので、比較的長い間知り合っている人が多いということになりますと、希望される核医学を得意とする施設がありましたら、その人も分かっていることが多いので、もちろん増やして、更に提供しやすい状況を増やしていくというのはありかなと思います。

（畑澤参与）ありがとうございました。

畑澤の方は以上です。

（上坂委員長）それでは、上坂の方から意見述べさせていただきます。

まず１点、細かい点で恐縮なのですが、３ページですね。この中の左の下の説明に非感染性疾患の診断にとあります。ここに腫瘍、それからアルツハイマー病の件は知っておりますが、パーキンソン病と書いてあります。このパーキンソン病の診断等にどのような薬剤と手法が使われるかを教えてください。

（中本教授）分かりました。一般核医学検査って割と最近減少している傾向にあるんですけれども、パーキンソンに対する脳神経内科由来の核医学検査って結構ステイブル、ちょっと多くなっている傾向あります。そのとき使っている薬としまして、ダットスキャンですとか、それからＭＩＢＧ、それから脳血流ですね。脳血流は一般的な脳の血流を見るんですけれども、脳血流とダットスキャンとＭＩＢＧというのはもうほぼセットのようにして出てくると。パーキンソン病に限らず、パーキンソン様の症状を来す、パーキンソン病をまだ診断する前の方も含めて依頼がありますので、高齢化社会ということで結構依頼が継続的にあって、むしろ増えているというのがあるかと思います。

（上坂委員長）脳血流検査の場合は、これはＳＰＥＣＴで、モリブデン９９、テクネチウム９９ｍの使用でしょうか。

（中本教授）これ施設によるんですけれども、京都大学の場合にはヨウ素１２３標識のＩＭＰを使っております。テクネチウム標識のＥＣＤですね、メインで行っている施設も多いと思いますけれども。

（上坂委員長）あとすみません、一つ気になって。ダットスキャンは、これは具体的にはどういう薬剤になりますでしょうか。ＲＩはどういう。

（中本教授）ヨウ素１２３です。

（上坂委員長）これも同じ１２３。

（中本教授）はい。

（上坂委員長）あと、ＭＩＢＧ、これも。

（中本教授）ＭＩＢＧもヨウ素１２３ですね。みんなヨウ素ですね。

（上坂委員長）なるほどね、分かりました。

それから、もう既に委員や参与から御質問があった件なのですが、是非このすばらしい活動を、そんなに急にでなくていいので、ゆっくり先生に御負担にならないようにやっていただきたいと切に思います。

私の経験を申し上げますと、私は原子力エネルギーマネジメントという分野に関してＩＡＥＡと教育連携を１５年程度やっております。ここでは毎回世界から約２０名、日本から約２０名の参加者がある３週間教育コースですね。この運営については、日本側は政府が支援している原子力人材育成ネットワークというのがございまして、そこに実行委員会があると。それから、ＩＡＥＡ側はエネルギー局のノレッジマネジメント化、知織継承でしょうかね、担当して相方チームで行っているという活動がございます。それで、今後このような活動を先生に全てというのは本当にお忙しくて大変だと思います。このイベントをしかるべき学会、協会、機関等でチームつくっても結構です。サステイナブルに運営していくということは現在議論されていますか。

（中本教授）どちらかというと、やはり核医学診療、核医学診断から治療にかけてというところがディスカッションの中心になってしまいます。それ以上のものというのがまだディスカッションは不十分かなというのが正直なところでございます。

（上坂委員長）核医学の診断と治療でよろしいと思います。是非チームで対応して、ＩＡＥＡ側を含めて双方２つのチームの事務局の方がいらっしゃるということはとても重要であります。ＩＡＥＡでは丸山さんのような方を必ず一人キープしていくということが非常に重要ですよね。

（中本教授）そうですね、はい。

（上坂委員長）それから、これも吉橋委員がおっしゃられたことですが、もうその次の段階で結構ですので、是非医学物理的な医工学的な部分も取り入れることを御検討いただければと。例えば今日の資料ですと、１１ページに横軸に分野の項目が並んでおります。ここの右側に例えば線量評価とか、医学物理的な要素を次の段階で御検討いただければと思います。

実は先日のこの定例会議で阪大の西尾先生に、御専門が医学物理なのですが、ＩＡＥＡの医学物理の教育ガイドラインというのがありまして、それに沿った日本での大学・大学院での医学物理教育コースの検討のお話を頂きました。今後西尾先生等に協力をお願いして、ここに無理なく少しずつ医学物理講義も入れて、海外の技師や医学物理士の教育にも貢献できるようにということを希望する次第でございます。いかがでございましょう。

（中本教授）ありがとうございます。本件はどちらかというと、医師のアジア地域の医師の養成ということで出来上がったコンソーシアムなので、我々が中心となって医師以外の人々の人材育成というのをＩＡＥＡのサポートの下にというのはちょっと難しいのではないかなと思います。ただ、その阪大の西尾先生の医療、医学物理のコンソーシアムが今後できたりですとか、あるいは何らかの活動の下に医師の立場からのサポート、そういう場合に例えば御依頼を受けてこのネットワークを利用して、我々のできることをお話しさせていただくとか、そういう協力でしたら喜んでさせていただけると思います。

（上坂委員長）はい、よく分かりました。

あと、このＩＡＥＡのアンカーセンターというのは国際共同研究も今後やられていくのでしょうか。

（中本教授）現時点では具体的な話はないんですけれども、ただこのアンカーセンターとして認証を受けるときにどのぐらい件数をやっていますかとか、どういう体制かというのはデータとして全部提出したという経緯がありますので、そういうしっかりとした数字が伝わっていますので、場合によってはそういうことを利用して話が回ってくるかもしれませんね。

（上坂委員長）はい、分かりました。

それでは、中本先生、御説明と質疑、どうもありがとうございました。

（中本教授）どうもありがとうございました。

（上坂委員長）議題１は以上でございます。

中本先生におかれましては御退席をよろしくお願いします。

（中本教授）はい。失礼します。

（説明者　退席）

（上坂委員長）次に、議題２について、事務局から説明をお願いいたします。

（中島参事官）今後の会議予定について御案内いたします。

次回の定例会議につきましては、令和８年１月２７日火曜日１４時から、場所は中央合同庁舎８号館６階６２３会議室、議題については、調整中であり、原子力委員会ホームページ

などによりお知らせいたします。

（上坂委員長）ありがとうございます。

それでは、その他、委員から何か御発言ございますでしょうか。

御発言がないようですので、これで本日の委員会を終了いたします。

お疲れさまでした。ありがとうございます。

－了－